

主相對するの時を趁ふて十分の歡を盡くすに非ずんば、別後に至りて相思ふとも將た何の益かあらんや、豈に茱萸灣頭の蹄路除かなるが爲めに歡を終へずして去らんと欲するか、然らば且つ請ふ黃公が家に一宿して以て今夕を永せよ、此の如きの風光を見て而して醉を成さずんば終に恐らくハ參差して時に違ひ爲めに此の東園の花に辜負せんことを何ぞ留まらざるや、曰く「即今相對不盡歡」曰く「風光若此人不醉反覆の處殊に味すべし」蓋し上句ハ湖景に對し言ひ下句は花に對して言ふ湖景は長く在れども花ハ則ち開謝す是れ殊に之を重言する所以なり

晋の王濬冲嵇阮の徒と黃公の酒壚に痛飲す故に之を借言す只酒あるの處と云はん迄なり

城傍曲

王昌齡

秋風鳴桑條。草白狐兔驕。邯鄲飲來酒未消。城北原平掣皂鵬。射殺空營兩騰虎。迴身却月佩弓鞘。

城旁曲ハ亦是れ樂府題此の詩専ら射獵の事を言ふ然れども此の題義甚だ廣ければ倣ふもの必ずしも射獵のみ泥すべからざるあり詩意甚だ明亮なれば釋義を須めず廻身却月佩弓鞘却月とハ半落の山月を謂ふ少年老虎を射り罷んで意態凜然乃ハち身を廻へし山月を背にし弓鞘を佩んで歸る其の豪氣猶ほ餘あるを見るが如し俊爽の至なり却月の二字正面の解は此の如くなるも裏面にハ以て弓狀を形容したる意ありと倣ひて見んことを要す

洪州客舍寄柳博士芳

薛業

昌齡ハ奇句俊格を以て稱す筈篋謠の如き尤も雄健の作なり此の篇ハ峻邁と雖仍ほ初唐調のみ其の律句多きも此か爲めなり

去年燕巢主人屋。今年花發路傍枝。年年爲客不到舍。舊國存亡那得知。胡塵一起亂天下。何處春風無別離。

薛業其の人事跡甚だ明ならず、唯此の詩に據つて其の柳芳と同時にして天寶間の處士なるを知るのみ、胡塵の句蓋し祿山の亂を指す、何處春風無別離一句沈痛、漁陽の磔鼓天地を震動す、則ち流離の苦、獨り我のみならず、滿地の干戈生民塗炭皆な言外にあり、且つ中晩を言ふ勿れ、則ち盛唐の諸人七古の傳ふべきもの正に枚舉に違あらず、而して滄溟概ね節畧に従ふ、此等の作の如き、固より其の最上乘に居るものにあらず、然るに仍ほ採收を蒙るもの、去年今年の語偶、大に初唐の口角に類したるが故のみ、嗚乎若し此を以て標準とせば、古詩の只去年今年等の語を用ゆれば、則ち可なるのみ、優孟の衣冠、眞に一笑を發すべし。

春江花月夜

張若虛

春江潮水連海平。海上明月共潮生。滌滌隨波千萬里。何處春江無月明。江流宛轉遶芳甸。月照花林皆似霰。空裏流霜不覺飛。汀上白沙看不見。江天一色無纖塵。皎皎空中孤月輪。江畔何人初見月。江月何年初照人。人生代代無窮已。江月年年望相似。不知江月照何人。但見長江送流水。白雲一片去悠悠。青楓浦上不勝愁。誰家今夜扁舟子。何處相思明月樓。可憐樓上月徘徊。應照離人粧鏡臺。玉戶簾中卷不去。攬衣砧上拂還來。此時相望不相聞。願逐月華流照君。鴻雁長飛光不度。魚龍潛躍水成文。昨夜閒潭夢落花。可憐春半不還家。江水流春去欲盡。江潭落月復西斜。斜月沈沈藏海霧。碣石瀟湘無限路。不知乘月幾人歸。落月搖情滿江樹。

此の詩を評釋するの前に於て先づ本選の年代次序に非常の錯亂あるを辨せざる可からず以下三首の皆な初唐の詩なり乃ほち宜しく卷首の王勃盧照鄰劉廷芝が諸作と駢列すべきものにして于鱗乃ほち遙かに之を盛唐諸人の後に置く豈に史に明文なくして其の人の年輩終に考ふ可からざるが故か然れば則ほち駱賓王の如きは如何王楊盧駱稱して四傑と爲す何が故に却つて之を最後に移せるや或は駱が作ハ唯鋪陳排比を旨として之を盧照鄰が長安古意に較ぶれば冗慢厭ふべきものあるを以て編次の序次稍之が褒貶を寓したるか然らば則ほち張若虛が此の作の如きハ蟬聯宛轉流暢圓美寔に劉廷芝が代白頭翁等の作の上に在り于鱗が平生の持論初唐を以て七古の正式と爲すより見れば何が故に又之を移して遙かに上位に附せしめざるや凡そ此の一種僻謬の見常理を以て解すべからざる

ものあるなり或は云ふ張若虛ハ開元中尙ほ生存して賀知章包信張旭と吳中四士の目ありと然れば則ほち初唐より盛唐に涉るの人物賓王に比して又其の後にあり序次宜しく李白杜甫諸人の上に在るべきものとす彼の時初唐の格調沈宋輩の爲めに益靡弱に陥らんとす想ふに若虛一たび其の才筆を揮ふて直ちに四傑の堂奥を衝き之を一振せんことを圖りしなるべし然れども時勢の變遷風氣の推移は復た苦々一格を死守することを容れず高岑王李出て大に步趨を改め李杜に至りて風雨分飛し魚龍百變す是れ年代と詩運の大略にして若虛の才も時尙に背馳する所あるが故に多く傳はらず僅かに茲の一篇を存す尤も當さに寶愛すべきものなり然れども此等の沿革は其の年代に依つて編次してこゝ始めて見る者をして心に自得せしむべし若し冠裳顛倒其の謂なき此の如くなるときは初學の

もの茫乎として律に迷ふ何に由つてか筏を捨て、岸に登ることを得んや、是れ予が特に本書を評釋して爲めに其の訛謬の處を摘正し、集矢の譏を受けて肯て辭せざるの一片の苦衷なり、

春江花月夜は陳の後主が荒譙の日孔都官江總等の諸狎客と俱に相唱和せし樂府辭中、特に艶麗の稱あるものなり、若虛因つて借つて題を爲し、專ら題中五字の義を演繹して三十六句の長篇と爲したり、其の千回萬轉變化極りなくして到底題面五字の意に歸着せるハ營へは龍の珠を争ふが如し、雲を穿ち霧に入り或ハ正或は側而して龍の睛と龍の爪との總て珠を離れざるなり、其の大意を綜すれば前後八句を以て一段とするもの各二段中間白雲一片去悠々の四句を一段として前後の四段の過渡承接の所とせるなり、
首の八句一段、四句春江より説き入つて夜月に及び月明千里灩灩と

して千里に亘る、是れ題の春江月夜なり、江流宛轉遶芳甸、芳甸の二字漸やく説て題の花の字に至り、次句月照花林皆似霰、花月を雙提して以て題面を完うす、林花明月の照らす所と爲りて點點として霰に似たり、形容の工妙神助あるか如し、空裏流霜不覺飛、汀上白沙看不見、又前六句を一束す、白沙流霜の飛ふを覺はず、看て見へざるものは都て月光の中にあればなり、霜の字上文の霰と虚實相銜む、文心細あることと髮の如し、

次八句一段、江天一色無纖塵の句、首一段を包括して一句と爲し、皎皎空中孤月輪、中に就て獨り月を拈出して下文感慨に入るの端と爲す、江畔何人初見月、江月何年初照人、無端に發問し次の四句之を解釋す、而して人生代代無窮已、江月年年望相似、は月に就て人の同じからざるを歎じ、不知江月照何人、但見長江送流水、ハ江水に就て人の同じか

らざるを慨す、亦人生の朝露の如くにして水月の長く存するを謂ふ、劉希夷か、今年花落顔色改、明年花開復誰在、と同意にして此れ更らに工なり、

次四句一段、概言すれば前二段を結んで後二段を起すなり、剖言すれば前の二句前二段をして化して一片の雲煙と爲り了らしめ、後の二句後二段の爲めに特に筆を改めて其の綱を提するあり、更らに之を細言すれば、白雲一片去悠悠の七字、輕輕に首の一段の春江花月の風景を一邊に排し去り、青楓浦上不勝愁の七字、次段江月に對するの感慨を收住す、誰家今夜扁舟子、何處相思明月樓、扁舟子は是れ婦に別れて、扁舟に在るの征夫、以て最後の一段の爲めに綱を提し、明月樓は是れ夫に別れて獨處するの思婦、以て下文一段の爲めに綱を提す、而かも此の征夫思婦は同じく江上に在つて月を觀るの人、上段の不知江

月照何人、則ち其の人、即ち是れなり、循環回轉の妙、宜僚の弄丸か、越女の舞、劍か、烏ん、之を名狀することを得ん、

次八句一段、何處相思、明月樓の一句を分寫して、樓頭の思婦が月を觀るの感懷を述べ、樓上の明月徘徊して鏡臺を照らす、簾を捲けども去らず、砧を拂へども還た來る、則ち月影依依として、戀す、復た人の相離れ易きが如きにあらず、人果して月に如かざるなり、以て遙かに第二段の感慨に廻映し、筆情飛はんと欲す、妙の思婦の胸中より體諒し出すにあり、此時相望不相聞、其の夫一去杳として消息なし、願逐月華流、照君、則ち安んず、月光に隨ふて飛んで、郎君が側に到るを得ん、此の句又月より一照す、鴻雁魚龍皆を江上の物、是に於て又江上たるを點醒す、魚雁の書信の意あり、兼ねて以て不相聞の句に關照するなり、

結八句一段舟中の征夫が月に對するの感懷を述べ誰家今夜扁舟子の句を分寫したるなり昨夜閒潭夢落花七字玄妙の至り上文無數の江月を點ずるも未だ花の上に廻照し到らず看て缺漏に似たり知らず其の實此に至つて別に一種の奇思妙語を倣して人意の表に出でしめんとするが故に上文數解中故らに之を回避して本段の爲に勢を蓄へたるを閒潭に落花を夢んで忽ち身の客中に在り久しく家に歸らざるを憶ふ江水春を流して落月復た斜流光の過むべからざるを感心益羈緒の堪に難きを覺ふ此の處兩箇の春の字を用ゆるもの上文又春に及ぶもの甚だ少きが爲めに之を補ふなり碣石の東北にあり瀟湘の西南にあり天南地北に流浪して家を去る益遠し知らず此の明月に乗じて家に歸り一家團圓の樂を消受するもの果して幾人かあるぞ只落月の沈沈たるもの徒らに此の征人思婦の情を

搖がしめて茫茫として江樹に滿つるのみ落月搖情滿江樹一句後二段の總結なれば情と征人思婦を總包するものと知るべし而して情搖くと云へば春自から其の中に在り江樹に滿つと云へば花自から其の中に在り題面の五字無數の演を受けて茲に又此の一句に總束せらるる匣劍帷燈陸離迴映初唐跡の文字に在つて殆ど第一位に居るものなりと謂ふも題言にあらざるべきなり

何景明が明月篇は初唐の四傑に倣ふと稱すと雖其の實本篇より脱化したるもの殊に多し初唐の調は杜少陵が七古の沈鬱頓挫百世の準繩となりしより多く人の貴む所と爲らず然れども杜亦曾つて之を重んじ江河萬古の流に喩ふ明代に在つて夙とに之を稱道し風人の義を得たるは初唐却つて杜の上になつてと言ふもの則はち何景明より助まる然れども是れ其の對手たる李空同が専ら杜調に模し

杜格に擬し甚しきは少陵の句を。撫割裂して以て詩道の古に復せるものと爲せるに對し之が對症の針灸を施したるのみ未だ初唐を以て七古の正格なりとは謂はざるなり李于鱗が輩の出づるに及びて始めて初唐を以て李杜を掩ふの説あり終に李杜の開闢變化縱横自在なるものを目するに變調を以てし七古の準繩一に之を初唐に取らざるべからずと謂ふに至れり景明の説は學詩の者の知らざるべからざる所なるも于鱗に至つては則ち妄誕殊に甚しきものなり作俑の責は景明或は辭する能はざるも若し之を以て景明の説従ふに足らずと謂はば亦妄なり詩を論ずるものは宜しく平心虛氣して細かに是非得失を考較すべし決して偏聽偏信して以て前人に瞞過せらるべからざるなり王阮亭の云はく接跡風人明月篇何郎妙悟本從天。王楊盧駱當時體其逐力圭誤後賢是れ景明を推すは妙悟を以

てす之を揄揚すること至れり而して莫逐刀圭誤後賢と云ふものは正に于鱗輩が其の糟を嘔つて其の波を揚げ終に救樂すべからざるの僻陋に陥りしが爲めにして言ふ洵とに公論なり

吳宮怨

衛 萬

君不見吳王宮閣臨江起。不捲珠簾見江水。曉氣晴來雙闕間。潮聲夜落千門裏。勾踐城中非舊春。姑蘇臺下起黃塵。祗今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。

詩截して兩段と爲す判然として鴻溝を劃するが如し前半は是れ盛時の吳後半は是れ亡國後の吳宮閣江面に平臨す故に簾を捲かずと雖坐して江水を見るなり透語大に妙未だ吳の亡ぶるに寫し到らずして斗然として吳を滅するものも亦亡ぶるを言ふ吳の哀廢の狀言はずして知るべし是れ逆筆法

なり、一結萬古興亡之感之を明月に繋ぐ能意自から深かし、西施は是れ勾踐の薦むる所、此を以て結とす筆情表裏に照透せり

衛萬其の人事跡年代俱に考なし、前人定めて初唐とせるは亦推測に出つるのみ、結二語太白の蘇臺絶句と一字を差せず、必ず聚訟せず、疑を闕て可なり、

帝京篇

駱賓王

山河千里國。城闕九重門。不觀皇居壯。安知天子尊。皇居帝里。函谷鶉野。龍山侯甸。服五緯。連影集星。纏八水分流。橫地軸。秦塞重關。一百二。漢家離宮。三十六。桂殿陰岑。對玉樓。椒房窈窕。連金屋。三條九陌。麗城隈。萬戶千門。平日開。複道斜通。鵲觀交衢。直指鳳凰臺。劍履南宮入。簪纓北闕來。聲名冠寰宇。文物象昭回。鉤陳肅蘭。壁沼浮槐市。銅羽應風

迴。金莖承露起。校文天祿閣。習戰昆明水。朱邱抗平臺。黃扉通戚里。平臺戚里帶崇牖。炊金饌玉待鳴鍾。小堂綺帳三千戶。大道青樓十二重。寶蓋雕鞍金絡馬。鬪牕繡柱玉盤龍。繡柱題粉壁。映鏘金。玉王侯盛。王侯貴人多近臣。朝遊北里暮南鄰。陸賈分金將燕喜。陳遵投轄尙留賓。趙李經過密。蕭朱友結親。丹鳳朱城白日暮。青牛紺幘紅塵度。俠客金彈垂楊道。娼婦銀鈎採桑路。娼家桃李自芳菲。京華遊俠事輕肥。延年女弟雙飛入。羅敷使君千騎歸。同心結縷帶。連理織成衣。春朝桂尊尊百味。秋夜蘭燈燈九微。翠幌珠簾不獨映。清歌寶瑟自相依。且論三萬六千是。寧知四十九年非。舌來名利若浮雲。人生倚伏信難分。始見田竇相移奪。俄聞衛霍有功勳。未厭金陵氣。先開石櫛文。朱門無履張公子。費亭誰

畏李將軍相顧百齡皆有待居然萬化咸應改桂枝芳氣已
 銷亡柏梁高宴今何在春去春來若自馳爭名爭利徒爾爲
 久留郎署終難遇空掃相門誰見知當時一旦擅繁華自言
 千載長驕奢倏忽搏風生羽翼須臾失浪委泥沙黃雀徒巢
 桂青門遂種瓜黃金銷鑠素絲變一貴一賤交情見紅顏宿
 昔白頭新脫粟布衣輕故人故人有湮淪新知無意氣灰死
 韓安國羅傷翟延尉已矣哉歸去來焉卿辭蜀多文藻楊雄
 仕漢乏良媒三冬自矜誠足用十年不調幾除迴汲黯薪逾
 積孫弘閣未開誰惜長沙傅獨負洛陽才

兩漢の賦體を變じて詩と爲し盛んに京師の壯麗を鋪陳して以て我
 里王侯游讎驕奢の風俗に及び慨世傷時の諷刺を以て終る盧照隣が
 長安古意駱賓王の帝京篇實に分道揚鑣して馳驅するものなり而し

て。盧。が。作。は。惜。詞。富。麗。極。む。と。雖。其。の。重。ん。ず。る。所。は。意。の。一。邊。に。在。り。駱
 が。作。は。命。意。嗟。痛。を。極。む。と。雖。其。の。重。ん。ず。る。所。は。詞。の。一。邊。に。在。り。是。れ
 亦。同。途。に。し。て。殊。歸。な。る。も。の。意。を。以。て。主。と。す。る。も。の。は。三。復。し。て。味。あ
 り。詞。を。以。て。主。と。す。る。も。の。は。一。覽。し。て。盡。き。易。し。盧。全。月。蝕。の。詩。を。作。く
 て。終。に。恠。誕。の。目。あ。る。も。の。は。詞。を。主。と。す。れ。ば。な。り。韓。退。之。其。の。詞。り。を
 増。減。し。て。却。つ。て。傑。作。の。稱。あ。る。も。の。は。意。を。主。と。す。れ。ば。な。り。詞。を。以。て
 意。を。運。す。べ。し。正。さ。に。詞。に。由。つ。て。意。を。造。く。る。べ。か。ら。ず。帝。京。篇。の。長。安
 古。意。に。及。ば。さ。る。も。全。く。詞。意。各。其。主。を。異。に。せ。る。に。あ。る。な。り。則。は。ち。讀
 む。も。の。宜。し。く。見。て。刷。華。の。用。に。供。す。る。集。字。譜。と。な。し。姑。ら。く。其。の。詞
 を。玩。べ。ば。則。は。ち。足。ら。ん。の。み。

山河千里國より椒房窈窕連金屋に至る長安山河帝闕の宏壯なるよ
 り星宿の分野關塞の堅固宮殿樓閣の結構に至つて止む是れ第二段

あり、不親皇居壯安知天子尊反、攝いて勢を生ず、帝都を寫す先づ皇居
 に因つて叙入す、極めて體を得たるのもなり、廿八宿中、井より柳に至
 る是を鶉首と云ふ、秦の分野なり、長安は秦の咸陽の地、故に鶉野と曰
 ふ、又漢の時水火金木土の五星、秦の分野に聚るとあり、五緯連影の句
 の指す所なり、八水は經渭也、鄴、滌、山、入河を謂ふ、百二の重關、卅六
 の離宮、是れ皆な漢の西都、賦中の語、漢の西都は則は唐の長安なり、
 「三條九陌、麗城隈より、黃扉通戚里」に至る、長安の市街の繁盛より以て
 諸官衙の建築及び文武百官王侯戚里の邸宅參差として望み見ゆる
 の狀に及ぶ、是れ第二段あり、鉤陳は紫微天宮を護衛するの星宿の名
 闕所は香木を以て造りたる階砌を云ふ、鉤陳、蕭關所とは百僚の邸宅
 の皇宮四方を圍みて散在せるの狀を言ふなり、壁沿は學宮の前を環
 するの曲池にして、槐市とは其の上に槐樹を列植したるか故に名づ

くるなり、屋上相風の銅鳳、天半承露の金莖、天祿閣以て文官を謂ひ、昆
 明池以て武官を謂ふ、朱邸は宗室の第、黃扉は宰相の門なり、
 「平臺戚里帶崇闕」より、蕭朱友結親に至る、右の王侯戚里が第宅中其の
 建築衣食の特に侈麗なるものを擧げ、賓客貴游の峰聚雲屯せる狀に
 及ぶ、是れ第三段、陸賈漢廷公卿の間に遊び千金を其の五子に分ちて
 因て代る、傅食す、陳遵ハ醉讌すること、に客の車轄を取つて井中
 に投ず、趙李は趙皇后李夫人の二人を云ふ、阮藉ハ詠懷に、西游咸陽市
 趙李相經過とあり、皇后夫人の族屬等相往來して親を結ぶを言ふな
 り、蕭は蕭育、朱は朱博、二人俱に前漢の時の人、進退相俱にせし密友
 なり、
 「丹鳳朱城白日暮」より、寧知四十九年非に至る、始めて叙して市上往來
 の男女に及ぶ、無賴游狹の子弟あり、桃李芳菲の娼婦あり、俱に皆な侈

靡淫樂に耽りて其の非を知らずと云ふに至つて止む是れ第四段なり、延年女弟といふ李延年其妹李夫人と俱に寵を武帝に得たる事を用ふ有への羅敷ハ敢て使君の馬に従つて去らず今の羅敷ハ然からずして皆貴人の娶る所と爲る一貞操のものなきを謂ふなり桂尊ハ桂を切つて酒尊中に薫したるもの九微ハ燈の名一燈臺に九蓋を安するものを曰ふなり四十九年非ハ伯玉が事借用に過ぎざるのみ古來名利若浮雲より青門逐種瓜に至る福禍相倚つて富貴浮雲の如く更らに恃むに足らざるを言ふ是れ第五段田寶嬰正に互に權勢を争ふて相移奪するに際し忽ち衛青霍去病が功勳の爲めに奴隷より自を興すあり金陵天子の氣未だ壓滅する能はざるに早やく沙丘石廓の惡を開らき出るあり朱門の張公子今は亡びて李將軍も亦亭に呵叱せらる蓋し人壽に限りあり百齡皆を待あるなり人事に

常を萬化應に改むべきのみ允留郎署ハ顔駟漢の文景武三帝に歴事して仍ほ郎署に沈滞し進まざりし故事空掃相門ハ魏勃謁を曹參に通せんとして得ず乃ち早夜に往て其の門外を灑掃したるの故事二句共に名利の數ありて得ずべからざるを言ふ當時一旦摠繁華以下四句ハ更らに一步を進む雖然ハ名利を得たりと云ふも亦久しく恃むべからず搏風の鳥も亦矢浪の魚と爲るの時あるなり黃雀巢桂ハ漢成帝が時の童謠昔ハ人に羨まれ今ハ人に憐まるの意を取りたり青門種瓜ハ秦の東陵侯世變に遭ふて流發し瓜を長安の青門に種へ活を爲す榮枯易地の感を謂ふなり

黃金鎖鑰絲變より結局獨負洛陽才に至る世態日に輕薄にして賢才下位に屈沈するを慨し以て自家の抱負を抒ぶ是れ第六段なり紅顏も忽ち宿昔と爲りて白頭猶ほ新なるが如し往身榮位に登りて其

の故人を輕んじ、脫粟布衣を以て之に贈る彼の公孫弘が如きものあり、韓安國の死灰に再び燃ゆる能はずして、翟廷尉の雀羅自から傷む、此の浮薄の世、賢士寧ろ望を屬すべけんや、已美ぬるかな、歸り去らんのみ、馬卿揚雄汲黯、長沙皆な借つて以て自から況するなり、遭迴の逡巡して進まざるの貌なり、汲黯薪愈積とは汲黯武帝に謂つて陛下の人を用ゆるは薪を積むが如く、後來の者をして上に居らしむと云へり、公孫弘大に東閣を開て四方の賢者を待つ、是孫弘開東閣の出典、長沙傳は賈誼なり、西征の賦に賈生は洛陽の才なりとあり、駱賓王初め長安の主簿と爲りて、數言事して用おられず、臨海の丞に貶せられ、快々として樂まざり、終に官を棄て去る、想ふに、時宰の抑阻する所と爲り、以て其の滿腹の評論を舒ぶるに由なかりしなるべし、此篇の未段、人才登庸の難きに於て三たび意を致すもの、蓋し餘痛あり。

るなり、惜ひかな、其の意詞の掩ふ所と爲り、徒らに蕪素元沓に流れて復た純飾する所なきに至れり、初學のもの此等の作を讀むには、須らく其の膏腴の處に留心し、以て我が擇用に供せんことを力むべし、此の作一篇の七古とては、實に上述の如く散漫の病あれども、其の用字に至つては、皆な錦繡皆な珠玉之を裁して、衣裳と爲し、之を治して佩となす、固より學者の如何に在るのみ、亦何ぞ其の靡弱を以て斥けて、顧みざるべけんや、賓王後ち徐敬業の幕に參し、爲めに檄文を艸す、則天武后の罪を暴斥して少くも假借する所なし、則天之を見て嬰然として驚き、其の賓王の手に出でたるを知り、歎じて曰はく、此の如きの才あつて用おざりしは、宰相の過なりと、賓王此の一知己を得て、憾なかるべし、徐の敗るゝに及んで亡命して終る所を知らず、

餘杭醉歌贈吳山人
丁仙芝

曉。幙。紅。襟。燕。春。城。白。項。鳥。只。來。梁。上。語。不。向。府。中。趨。城。頭。坎
坎。鼓。聲。滿。庭。新。種。櫻。桃。樹。桃。花。昨。夜。撩。亂。開。當。軒。發。色。映
樓。臺。十。千。兌。得。餘。杭。酒。二。月。春。城。長。命。杯。酒。後。留。君。待。明。月。
還。將。明。月。送。君。回。

仙芝亦是れ開元中の進士餘杭の尉に官せり餘杭は今の浙江杭州に
して即ち西湖の地其の酒を以て名あるは神仙傳に王方平餘杭の
姥に命じて酒をばしむることあるにても知られたり起比興の義
に取る燕にして紅襟鳥にして白項俱に容易すく見るべからざるも
の以て吳山人に喩ふるなり我が梁上に來つて俱に語るべきも決
て我が府中に向つて趨らず蓋し其の人以て爾汝の交を爲すべきも
斷として屈すべからざるを謂ふなり梁上は燕より生出し府中は鳥
より生出す漢の張翳が傳に城上の鳥府中の諸吏等の語あるを假用

せるなり城頭坎坎として鼓聲曙を報ず山人の曉を犯して我が春城
に來るものは庭中新に櫻桃樹を植へ加ふるに桃花昨夜開て正に我
が樓臺に相映するを見んが爲めのみ好し山人が爲めに一斗十千の
餘杭の美酒を買ひ此の春城二月の好風光に當つて終日相對して長
命杯を酌まん瘦子山が詩美酒餘杭醉新年長命盃とあり長命杯とは
福壽を祝するが爲めに下せし名此の處借つて以て終日留飲する
の盃の義と爲したり花を賞して酒に對し酒罷んで又君を留めて晚
に到り明月の出つるを待たしむ月を待つて已に出づ則ち又月を
して君が山に回るを送らしむ結語超絶雅絶短韻と雖頗る風趣多し
此の種又無はら興會を費ぶものなり

此の書は、我が國の歴史を研究するに必要なる資料を、
 簡明扼要にまとめたものである。其の編纂は、
 著者の苦心のたまひである。其の印刷は、
 共益商社印刷部の巧手による。其の紙質は、
 上等の和紙を用いた。其の価格は、
 二十五銭である。其の発行は、
 明治二十五年十月二十日である。其の
 発行所は、東京市芝區宮本町二十九番地
 共益商社印刷部である。其の發行者は、
 出村收吾である。其の著者は、森泰二郎
 である。其の發見元は、新進堂である。

明治二十五年十月二十日印刷
 明治二十五年十月廿一日出版

正價金二十五錢

著 作 者
 森 泰 二 郎
 東京市麹町區永田町一丁目十九番地

發 行 者 兼
 出 村 收 吾
 東京市芝區烏森町一番地

印 刷 所
 共 益 商 社 印 刷 部
 東京市芝區宮本町二十九番地

發 見 元
 新 進 堂
 東京市芝區烏森町一番地

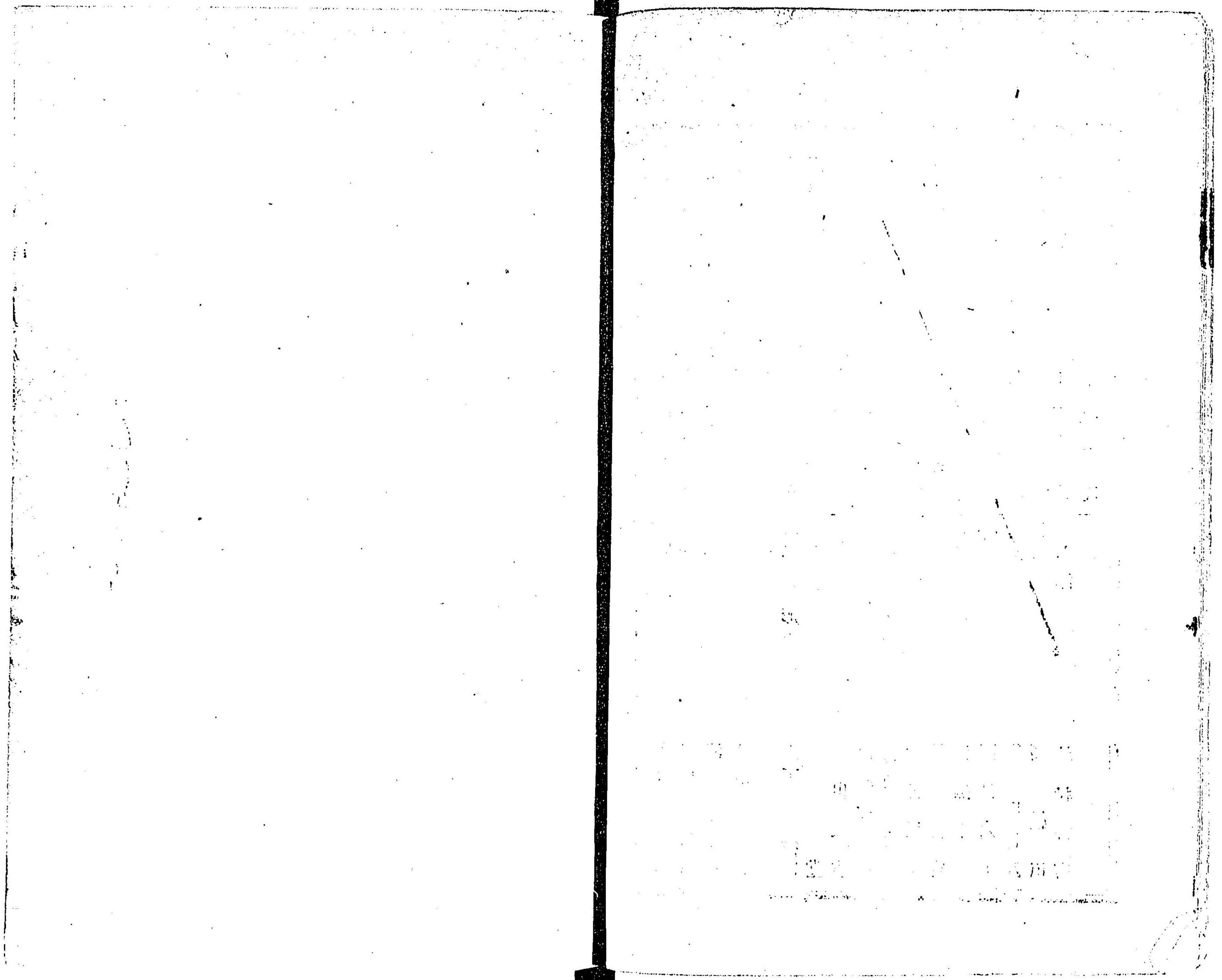
版 權 所 有

版權登錄

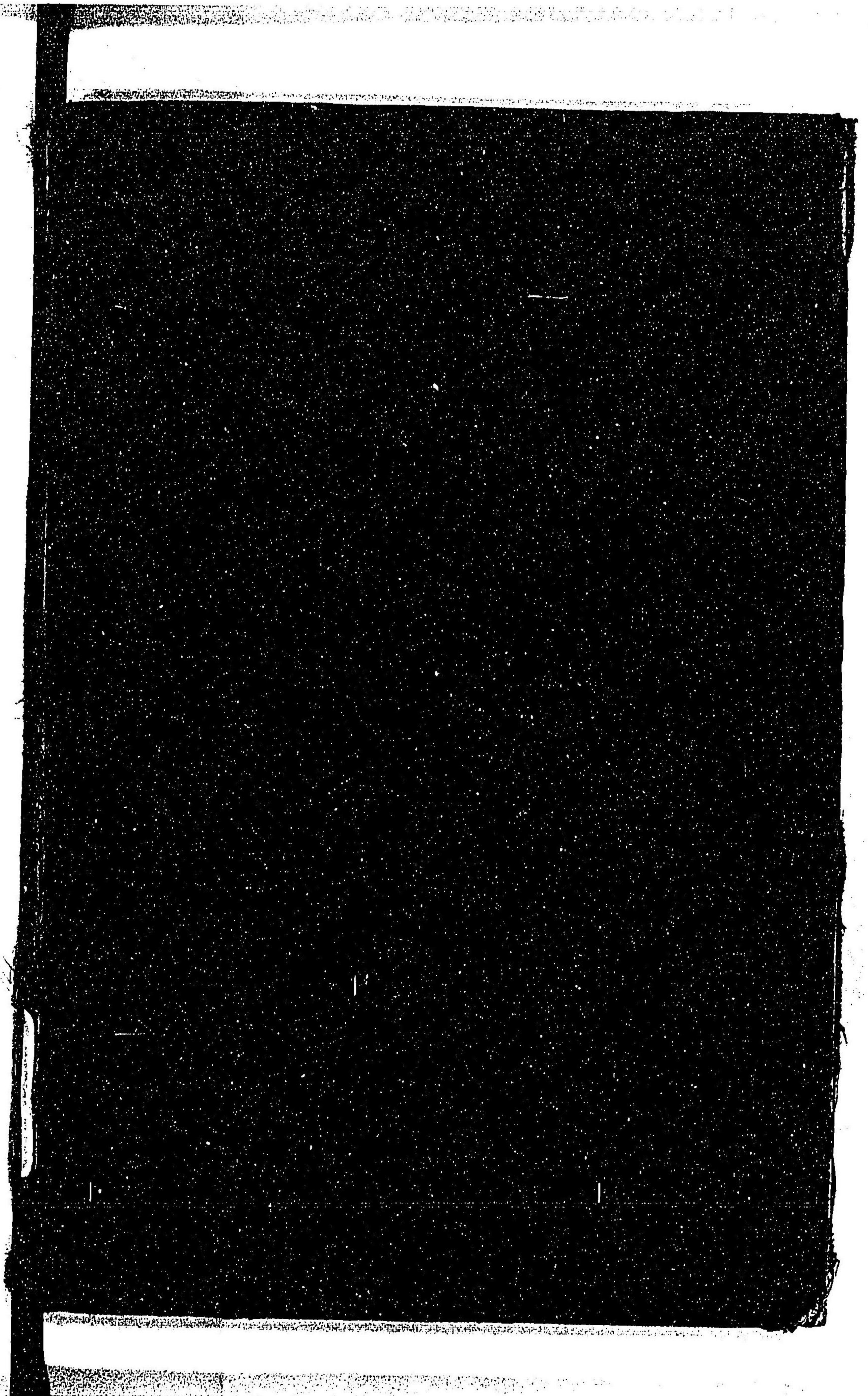
大賣捌所

東京日本橋區南傳馬町	東京日本橋區表神保町	全日本橋區新大坂町	全通寺丁目	全二丁目	全京橋區南傳馬町	全八官町	全尾張町	全神田裏神保町	全本郷春木町	全芝區三田	大坂市	神戶	熊本縣熊本市	山見島市	廣島			
目黒支店	東京支店	富山支店	小林喜右衛門	大倉書	小倉新兵衛	嵩山堂青木	庚寅新誌社	東海堂	井上藤吉	弘憲堂	福島屋	書原彦七	梅岡平助	吉岡次郎	長崎次郎	清氷一二三	吉田幸兵衛	松村善助
尾州名古屋	全	四日市	伊勢津	豐橋	靜岡	和歌山	濱松	德島	越中富山	高山	全	姫路	岡山	長崎	佐賀	久留米		
川瀬代助	三輪文二郎	伊藤善太郎	川島書	高須廣吉	廣瀨市磯	平井文助	谷島源三郎	阪井万吉	車次郎	升屋十兵衛	柳正堂	朝二榮堂	竹内彌三郎	鶴野書	河内汲古堂	菊竹書店		

高知	相州小田原	上州高崎	全前橋	信州長野町	全松本町	上總茂原町	栃木	米澤	仙臺	下總東金	全佐原	全古河町	常州水戸	下總堺町	全水海道	下野宇都宮	酒田
山中專助	大島次郎兵衛	煥乎堂	煥乎堂	小柳屋書店	水琴堂	九屋茂兵衛	宮川庸三郎	須佐權平	木村文助	多田屋書店	朝野利兵衛	高木正三堂	川又銀三	高木直次郎	新々堂	田中正太郎	鈴木喜八
福島縣福島	全郡山	全三春	秋田	函館	山形縣山形市	金澤	岩手縣八ノ戸	全盛岡市	宮城縣石ノ巻	越後新潟	全	全長岡	水原	村上	高田	直江津	
上野屋彦太郎	富屋久之丞	渡邊英一	成見清兵衛	魁文社	五十嵐太右衛門	雲根堂	浦山政吉	池野七太郎	山口啓之助	櫻井産作	林留吉	目黒十郎	西村六平	備前屋竹八	高橋	柿村書店	



68
351



100418-001-2

68-351

唐詩選評釈

森 槐南 / 著

M25-30

DBW-0677



